

令和6年度末(2025年3月)各種委員会活動・支部活動等 中間報告

常任理事 会担当者	委員会名	委員長	令和6、7年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	中間報告(令和6年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
小田	理事会・拡大常任理事会	小田 義直	理事長として特に1. リサーチマインドを持つ病理医育成、2. 国際志向性に富んだ病理医育成、3. 病理専門医数の増大の三点に重点を置き、その実現に向け理事会・常任理事会を運営してゆく。病理専門医数の増大に関しては、全国的な剖検数の減少と、専攻医登録者数の伸び悩みがリンクしているようなので、その対策を早急に講じてゆく。ダイバーシティを考慮しサステイナブルな学会活動を維持するため、各種委員会やワーキンググループに積極的に女性や若手を登用して運営してゆく。	減少傾向にあった病理専攻医登録者数が大幅に増えた。その要因を解析する必要がある。剖検数減少に対しては内科学会、医療安全調査機構と連絡会議を行い対策を協議した。2025年春の総会で内科学会および機構を交えた病理解剖に関するシンポジウムを行う予定である。若手病理医の活動を活性化する為にUnder 40 WGを設置し学術集会での企画を行う予定である。若手が多く参加できるよう各種委員会は学術集会時の対面ではなく随時オンラインでも開催可能なようにした。国際交流については英国、ドイツ、ヨーロッパ、中国との交流事業の時期、費用分担などについて体系的に整理を行い円滑に進むようにした。
豊國	倫理委員会	谷田部 恭	・日本医学会による「学術集会への演題応募における倫理的手続きに関する指針」の改訂に伴い、2024年度以降の病理学会学術集会の演題登録についての基準を作成する。 ・剖検症例の研究使用についての病理学会指針を策定する。 ・学術研究に際しての個人情報保護法の問題については倫理指針と関連しているが、大学・国立研究開発法人以外では異なることから、それ以外に所属する会員へ情報発信していきたい。	・日本医学会による「学術集会への演題応募における倫理的手続きに関する指針」の改訂に伴い、病理学会としての演題登録倫理指針への改訂を目指して準備を始めた。 ・「患者に由来する病理検体の保管・管理・利用に関する日本病理学会倫理委員会の見解」の見直しについてメール、委員会を開催し、ドラフトを作成している。
大橋	COI委員会	大森 泰文	COIや倫理に関する問題は、その多くが手続き上の形式的なミスによるものであるが、しばしば関係者に重大な結果がもたらされる。会員の研究成果やその他の業績が些細な配慮不足でその価値が棄損されないよう、注意喚起をしていく。	「固形癌HER2病理診断ガイダンス改訂第3版」策定WG委員のCOI申告を精査し、理事長に対して答申を行った。COI定時申告を課す対象となる役員および各種委員、計138名から提出された2024年度COI申告書の内容を精査し、受理した。「病理診断支援AIの手引き」策定WG委員のCOI申告書を精査し、現在答申書の作成作業中である。
豊國	個人情報及び匿名加工情報取扱い委員会 活動休止予定	谷田部 恭	・JP-AID事業が終了し、その後のデータ利活用の公開に際しての確認も完了したため、R6年を最終年度として委員会の終了を検討する。	定款の変更を避けるため、休止として推移を見守ることにした。
	学術評議員資格審査委員会	伊藤 智雄	委員の連携により、学術評議員内規に基づいた公正で適切な審査を進めてゆく。合わせて、問題点などがあれば適宜改善に努めてゆく。	本年も厳格な審査を行い、学術評議員43名を資格有りと認定した。来年度に向けても厳格な審査を行ってゆく。
	功労会員・名誉会員資格審査委員会	古川 徹	規定に従い名誉会員の審査ならびに功労会員の候補者の資格審査を行い、適切な候補者を推薦する。	名誉会員内規・申し合わせ事項の改訂を理事会に提案した。規定に沿って功労会員、名誉会員の推薦を行った。
大橋	企画委員会	大橋 健一	学会の発展に資する総務的な種々の事項を立案・検討する。学会の将来構想、機構改革、その他の委員会に属さない重要事項につき検討する。理事会、委員会活動の活性化のため、女性、若手の登用等の対策を積極的に進める。会員、専攻医増加のための対策を検討する。剖検数減少に対する対策を検討する。	若手病理医の研究活動の活性化のため、Under 40 WGを立ち上げた(模本委員長)。北海道での総会時からUnder 40 WG企画のシンポジウム、ワークショップを開けるように企画を進めることになった。会員数増加、専攻医増加のための対策が話し合われた。内科学会、医療安全調査機構と話し合いが行われた。会員システムの改修が進められた。学術評議委員会・専門医部会のある方について議論され、総会時の合同開催が行われることになった。
	DEI推進委員会	樋田 京子	本委員会では女性のみならず、地域、職場、家庭環境など、様々な背景を持つ本会員の多様性を認め、本会の事業に自発的に参加しやすいよう一人一人に適した環境を整備するとともに、誰もが本会の発展のために活躍出来るような機会を提供することを目的とする。本委員会はDEI推進のための課題の把握とその対策に関する業務を行う予定である。そのために本会事業への参加の推進及び必要な啓発活動、本会の事業に関する課題の把握及びその対策に関する業務を行っていききたい。	前期に実施した病理医の働き方に関するアンケート結果の解析を進め、会員の様々な働き方の実態を明らかにした。また、多岐にわたる多くの意見の集計作業も終わりつつある。4月の総会において一部をポスター発表する予定である。
	登録衛生検査所等における「病理診断」に関する検討委員会	大橋 健一	登録衛生検査所等における病理診断に関わる諸問題を整理し、対策を検討する。保険医療機関間の連携病理診断を広げるための方策を検討する。日衛協代表との交流、意見交換を進める。	非公式に日衛協との話し合い、交流が進められた。病理検査報告書の取り扱い、名称についてアンケートを依頼し、実行された。
	会員システム検討WG	中黒 匡人	現在の会員システムの問題点を検討し、新システムに必要な機能を検討していく。	業者選定は終了し、現在新会員システムの作りこみを開始している。
	支部委員会	久岡 正典	7支部における今日の活動状況について情報を共有し、その中で有意義な取り組みや参考となる運営方法などを、各支部で活用を図るべく提供すると共に、課題が存在する場合にはその解決策を探る。各支部での病理医のリクルートや会員の生涯教育等に資する活動を引き続き支援していく。	委員会を2回開催し、7支部の活動状況の確認と問題点を含む意見交換を行った。また、各支部の会計の状況や事務局の業務負担、支部専用ホームページの運営、相談窓口設置への対応状況等をアンケート調査により把握し、情報共有した。
	財務委員会	大橋 健一	学会の財務基盤の安定性が維持されるように努める。財務の視点から、学会の発展のための課題、将来構想を検討し、適切な支出をする。会員システムの改変などシステム関係に大きな出費が今後予想されるが、適切に対処する。	2023年度の正味財産増加額は35,354,441円と前年度に比べて26,836,456円の増加となった。正味財産期末残高も337,205,695円となって財政的に健全な結果となった。2025年度の予算案では2,244,023円のプラス予算を見込んでいる。
			現在行っている国際交流事業の継続を行う。更には人的なつながりを深くする努力を行う。 若手病理医が留学を目指すための手助けとなるような行事を開催する。	英国病理学会、ドイツ病理学会、欧州病理学会とのMoUを締結した。中華病理学会とのMoU締結に向けて準備を進めている。フレンツェ大学病院訪問を行った。病理学会秋期大会でモーニングセミナーを開催し、留学希望者への助言の場を提供した。
都築	国際交流委員会	都築 豊徳		
田中	学術委員会	田中 仲裁	1)学術委員会の重要な任務の1つは、各学会賞の決定である。日本病理学賞、診断病理学賞、学術研究賞、症例研究賞について各賞の意義を再確認しながら、円滑に選考を進め、受賞者および学会が更に発展するように役割を果たしたい。 (2)総会、秋期特別総会のあり方も学会の学術活動のコアである。特に英語化、国際化については他学会の様子を踏まえながら病理学会としてのあるべき姿を模索していきたい。	(1)総会、秋期特別総会における学術プログラムとスポンサーセミナーの関係について検討がなされ、日本病理学賞・病理診断学賞・学術研究賞・症例研究賞の受賞講演はプレナリーとして実施することが確認され、それ以外の部分については、会長に一任することが確認された。(2)学術奨励賞(応募12件)、学術研究賞(応募14件)、症例研究賞(応募4件)については受賞者が厳正な審査の上決定された。
牛久	編集委員会	牛久 哲男	学会刊行物の編集・発信の安定した運営に努める。会員の診療、研究活動に役立つ情報を提供し、随時アップデートを行う。	学会刊行物に関する運営を継続。各刊行物(Pathology International、診断病理、専門医会報、剖検輯報)については各担当委員会を参照。
田中	PI刊行委員会	田中 仲裁	PINの円滑な査読を行い、インパクトファクターが上がる様に尽力していきたい。2023年のIFは2.2であり、前年から0.079増加とほぼ横ばいであった。順位はPathologyの分野の全72雑誌中53位から45位へと上昇した。	2025年1月から2026年12月までの任期で刊行委員、常任刊行委員が新規に任命された。刊行委員は原則、査読回数の多い会員が任命され、査読に携わらなかった委員は退任となった。その結果、刊行委員は、全体で146名のうち新規に44名が任用、54名が退任となった。
	PI常任刊行委員会	田中 仲裁	PINIは学会の英文機関誌であるので、質の高い病理学研究成果を数多く掲載して、会員自身が研究成果を是非PINIに投稿したいと考えるようなプレゼンスにしていきたい。現在初回判定まで9日と非常に短時間で査読が行われており、迅速な審査を心掛けたい。	常任刊行委員は、各査読領域1名から3名で構成されており、総勢41名で、各領域の委員と相談しながら適宜交替となった。ワイリー社の都合で、査読システムのWEBシステムが変更となり運用面でわかりにくい部分もあるが、PINの事務局がその都度対応しており査読に遅延は生じていない。2024年10月から、FAST TRACK制度は廃止となった。
牛久	「診断病理」編集委員会	牛久 哲男	会員にとって有意義な総説の企画、掲載を充実させる。投稿規定等の見直しを行う。診断病理の電子化とそれに伴うDOI付与を完了する。	オンラインジャーナル掲載プラットフォームであるJ-stageを利用した診断病理の電子化、オープンジャーナル化に向けた作業が完了し、2025年4月号からJ-stage掲載がスタート予定である。幅広い読者に読まれる雑誌になることが期待される。
	病理専門医部会会報編集委員会	池田純一郎	『診断病理』の発刊に合わせて年4回の会報を発行する。専門医制度に関わる最新情報を専門医・専攻医の皆様にも周知するとともに、各号の特集記事、各支部学術活動報告を含め、充実した内容を盛り込んでいきたい。	『診断病理』の発刊に合わせて年4回の会報を順調に発行している。専門医制度に関わる最新情報を専門医・専攻医の皆様にも周知するとともに、各号の特集記事、各支部学術活動報告等を充実させたものにするべく検討している。
	剖検情報委員会	宇於崎 宏	過去から引き継いでいる、剖検情報の収集と活用、剖検輯報の編集に、引き続き努めて参ります。本委員会でもICD-11の日本での活用状況に対応して参ります。	剖検輯報65輯を発刊、66輯のデータを整理している。ICD11の日本適用に対応、疾患コードの検討を行っている。
都築	癌取扱い規約委員会	都築 豊徳	委員の若返り及び女性参画を促進する。ICCRとの協力体制を継続し、国際的に通用する規約作成を目指す。規約改正の情報を早期に会員に提供できる体制維持に努める。	体癌取り扱い規約に対して、委員の推薦を行った。規約の現状に対するアンケートを行った。
	小児腫瘍組織分類小委員会	井上 健	代表的な希少がんであり、時に病理診断が難しい小児腫瘍について、症例検討会や教育講演を行うとともに、小児腫瘍のWHO分類が新たに刊行されたことを受け、小児腫瘍の病理診断に関して「小児腫瘍病理診断の手引き」を公開する予定である。また、「希少がん診断のための病理育成事業」とも協働しつつ、小児病理医の育成に注力していきたい。	小児腫瘍症例検討会を2024年9月6日に開催し、24症例の提示・検討を行うとともに、小児肝腫瘍についての教育講演を開催した。症例検討会の内容は、日本小児血液・がん学会雑誌2025年第1号に掲載予定である。また、「小児腫瘍病理診断の手引き」を作成し、2024年10月2日に日本病理学会会員専用ページに公開した。引き続き小児病理医の育成に尽力していく予定である。
	日本病理学会領域横断的がん取扱い規約検討WG	渡邊 麗子	癌治療学会では、領域横断的癌取扱い規約検討委員会の新委員長、新副委員長が決まり、令和6年2月19日の理事会で領域横断がん取扱い規約第二版の改訂計画内容が承認された。4月には病理学会を含む関係学会からの代表委員が集まって第2版改訂作業の具体的な作業工程を立案し、令和6年度中の出版を目指す。	領域横断的癌取扱い規約第2版の出版は2025年夏〜秋、出版社は金原出版株式会社の見込みで準備中。
金井	病理診療ガイダンス委員会	金井 弥栄	領域横断的がん取扱い規約・AIガイダンス・ゲノム研究用診療用病理組織検体取扱い規程等、各種診療等のガイダンスの適正な作成を行うための、基盤整備を行う。極力フォーマットを統一し、重複を最小限にし、現場の実用に資するガイダンスとなるよう、利便性の向上を目指す。また各策定委員会に関して、適切な利益相反管理を行う。	領域横断的がん取扱い規約、AIガイダンス、ゲノム研究用・診療用病理組織検体取扱い規程等、各種診療等のガイダンスの作成を担当する委員会の代表等が会合し、編集の進捗と基本方針を共有した。治療選択にかかる記載を含むガイダンスを策定する委員会において、日本医療機能評価機構EBM医療情報部(Minds)「診療ガイドライン策定参加資格基準ガイダンス2023」にそった、COIの取り扱いが行われるように取り計らった。
	病理診断支援AIの手引き策定WG	吉澤 明彦	近年の病理診断領域におけるAIの広がりを背景に、本WGでは「病理診断支援AIの手引き」を策定、発表してきた。本WGでは、自由な研究の領域は確保しつつ昨今のAIの適切な利用のあり方を念頭に時代に即した内容を今後も定期的に提案していくことを目標とする。一方でAIは多様化しており、2023年度後半から開発経験をもつ若い世代の委員を招聘したが、スピード感をもって発信することが一つの課題である。	「病理診断支援AIの手引き」の改訂作業を行っているなかで病理診断支援AIのプログラム医療機器の基準を示すようSaMDより要望があり、その基準をPMDAの指しを仰ぎながら進めてきた。2025年4月には発表する予定である。以降、改訂作業を進める。
	ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程策定WG	畑中 豊	初版発出から数年が経過したため、新規実証データやRWD等に基づき診療用規程の改訂を行う(前期から改訂作業継続中)。令和4年度に発出した「がん全ゲノム解析等のための検体取扱いガイダンス 第1版(暫定版)」について改訂を検討する。	「ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程 改訂第2版」と「がん全ゲノム解析等のための検体取扱いガイダンス 第1版(確定版)」のいずれも令和6年度内の発出を予定していたが、新規実証データの収集等に時間を要し遅れている(現在進行中)。いずれも次年度での発出を目指している。
	固形癌HER2病理診断ガイダンス策定WG	金井 弥栄	「固形癌HER2病理診断ガイダンス 第3版」の編集・公開を行う。承認・適応拡大等が出来た場合には、日本病理学会員への速やかな情報伝達に努める。	「固形癌HER2病理診断ガイダンス 第3版」発出のため、乳癌・胃癌・唾液腺癌・大腸癌について、サブワーキンググループごとに執筆を進めた。エンハーツの適用拡大等に向けて、執筆の任に適切な委員の追加を行ない、免疫染色検査パートの充実を目指している。Minds「診療ガイドライン策定参加資格基準ガイダンス2023」に従って適切にCOIを取り扱っている
牛久	用語委員会	伊藤 智雄	適切かつ統一された用語の使用は重要であり、適宜ミッションを確実に履行し、適切な用語の定義等の策定に努める。	厚生労働省より依頼された「疾病及び関連保健問題の国際統計分類」の第11回改訂版(ICD-11)と訳作業に対する精査と意見を行った(8万用語、内病理関連5百超)。現在、厚労省が取り纏め中(延期されている)。

令和6年度末(2025年3月) 各種委員会活動・支部活動等 中間報告

常任理事 会担当者	委員会名	委員長	令和6/7年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	中間報告(令和6年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
豊國	研究推進委員会	増本 純也	基礎医学としての「病理学」だけでなく、臨床医学を支える「病理診断」においても、急速に発展する分子生物学、生化学、遺伝学、免疫学、AIなどの情報技術の知識へのキャッチアップが重要な課題です。このような病理学会会員のニーズに応えるべく、病理学会カンファレンスで先端研究や先端技術を紹介し、ひいては、一般会員のみならず、医学部学生にもリサーチマインドに溢れた「病理学」の魅力を伝えたいと思います。	第20回日本病理学会カンファレンス(山形大学世話人：二口充教授)を2024年7月26日27日に山形テルサ アブローズで開催した。第21回日本病理学会カンファレンス(愛媛大学世話人：増本純也教授)を2025年7月25日26日に道後温泉杏湯の守で開催予定である。第114回総会「先端的分子病理学講習会」のテーマと講師について石津 明洋 先生(北海道大学)「抗好中球細胞外トラップ(NETs)と病態形成」渡辺 亮 先生(京都大学)「空間的遺伝子発現」柴田 龍弘 先生(東京大学)「ゲノム解析によるがんの理解」榎本篤先生(名古屋大学)「がん線維芽細胞の多様性」で開催予定である。その他女性病理医に参加のしやすいカンファレンスやイベントの方法を検討中である。
	研究委員会	豊國 仲裁	研究委員会が掌握する日本病理学会として取り組む研究事業に関して適切な運営が行われているかどうかを管理・指導する。個人情報や匿名加工情報の取り扱いを適切に実施したい。JP-AID DB推進事業ならびにSCRUM Japanとの共同研究が始動しており、病理学会のさらなる発展のための環境作りを推進する。	希少がん事業と小児腫瘍組織分類小委員会は適切に運営されている。JP-AID事業では、その利用を希望する大型案件が順調に採択され、病理学会の財源の一部となっている。国立がんセンターよりSCRUM-Japan MONSTAR-SCREENIに関する共同研究の申し出があり、会員の参加が可能となるようにすり合わせを進めつつある。
	JP-AID DB推進事業WG	倉田 盛人	およそ9.6万症例分の病理デジタル画像(Pathology-Whole Slide Imaging: P-WSI)を収録した「日本病理学会デジタル画像データベース」を維持・管理を行う。現在までに、病理学会会員は無料で検索・閲覧出来るシステムが構築されているが、生涯教育などに利用可能であることを学会員に広く情報共有を行う。また、利用者は希望に応じてP-WSIをダウンロードしてAI研究等に利用することが可能であるが、さらなる利便性を向上させたデータベースに移行させる。	デジタル画像データベースはこれまでに合計18.8万枚のダウンロード利用申請があった。これまでは大容量のデータを使用する際には、ダウンロードなどにおいて不便な点が多かったが、利便性向上の為、データベースの移行作業を行い、検索・ダウンロード機能の強化を計った。今後、さらなる機能強化を図りながら、引き続き多くの研究者に利用頂けるように努めたい。また、今後は教育コンテンツとしての可能性についても積極的に検討する予定である。
佐々木	希少がん病理診断支援検討委員会 (※希少がん診断のための病理医育成事業)	佐々木 毅	2024年度は国庫補助金として、3,500万円の予算をいただき、新たに希少サブタイプとして消化器と呼吸器を加え、10領域(骨軟部、脳腫瘍、小児腫瘍、リンパ腫、頭頸部、皮膚腫瘍、希少サブタイプ-乳腺、希少サブタイプ-婦人科、希少サブタイプ-消化器、希少サブタイプ-呼吸器)で、全領域による希少がん病理診断講習会を4回と希少がんE-ラーニング問題全領域での作成を行う。またエキスパート育成講習会については、10領域すべてで行うことを計画している。さらに2025年度予算獲得に向けて、厚労省に対して新たな事業計画案を希少がん病理診断支援検討委員会にて検討する。	新たに希少サブタイプとして消化器と呼吸器を加え、希少がん病理診断講習会4回とエキスパート育成講習会10領域(骨軟部、脳腫瘍、小児腫瘍、リンパ腫、頭頸部、皮膚腫瘍希少サブタイプ-乳腺、希少サブタイプ-婦人科、希少サブタイプ-消化器、希少サブタイプ-呼吸器)で、全14回の講習会を開催した。さらに2026年度予算獲得にも成功し、2026年度も事業を継続する予定である。
金井	ゲノム研究用病理組織検体取扱い規程策定委員会	金井 弥栄	病理組織検体をゲノム等オミックス研究に資する品質を保持して収集・保管することで、日本病理学会会員が次世代のゲノム医療を創出する研究に貢献できるように、病理組織検体取扱い手順を標準化する。新規に普及したオミックス解析手法に対応するように、現行の規程を実証解析に基づいて改訂し、研究基盤整備における病理学の意義を日本病理学会外にも発信できるようにする。	ゲノム病理標準化講習会受講者等から要請のあった解析項目を追加し、追加実証解析データを取得して『ゲノム研究用病理組織検体取扱い規程(補遺版)』を作成した。日本病理学会のガイダンス類は全般に、頻回の改訂を速やかに行いwebページから発信する方針に転換しているので、研究用規程改訂後も学会内外に無償で広くweb公開することを決定した。研究目的で行われる、メタボローム・プロテオーム解析に対応した病理組織検体取り扱いの標準手順を定めるための、実証解析を準備している。
豊國	SCRUM-Japan MONSTAR-SCREEN事業検討WG	谷田部 恭	・パイロットスタディーを立ち上げ、病理学会会員が利用するにあたっての概要・課題を得る。 ・具体的な道筋を立てた後、会員に公募し研究を募る。必要に応じて推薦枠を設ける。	・多忙な先生方が多く、予定が合わないことから委員会の開催が難しかった。 ・パイロットスタディーのための研究計画を早急に確定し、倫理審査委員会へ提出したい。
森井	病理専門医制度運営委員会	森井 英一	日本専門医機構と連携しながら、病理専門医研修プログラム、専門医認定試験、資格更新の運営と改善を図り、質の担保された専門医制度を実現する。さらに病理専門医数の向上を目指した制度設計を図る。	日本専門医機構と連携しながら、病理専門医研修プログラム、専門医認定試験、資格更新の運営と改善を図り、質の担保された専門医制度を維持している。施設認定についても新たな認定制度を検討している。
	病理専門医資格審査委員会	中黒 匡人	審査の作業手順が徐々に複雑になってきており、審査の効率化、将来のリモート審査の方向を見据え、更新審査でも電子化を進めたい。受験資格審査は順調に電子化が完了している。	電子申請を併用した更新審査の初年度を無事終えた。資格審査・更新審査とも基本形が完成したので、より業務の効率を上げるように細部の微修正を行って行く予定である。
	病理専門医試験委員会	柴原 純二	WSI等を活用した新たな形式での専門医試験が定着した。引き続き試験の質を担保の上、円滑な試験運営を目指すとともに、従来の様式を引き継いだ現状の試験の内容について検討を行い、必要に応じて改善を行う。	病理専門医試験は適切な内容で、円滑に実施されている。病理専門医試験の出題基準となる「病理専門医 専攻医マニュアル」の「研修すべき知識・技術・疾患名リスト」の改訂を行った。
	病理専門医試験実施委員会	非公開		
	病理専門医施設審査委員会	坂谷 貴司	施設認定については、認定施設A、B、S、登録施設、研修協力施設の区分で長らく行なっているが、専攻医養成なども鑑みた「認定教育施設」として新区分の制度設計を行い、周知後、2年間の任期内に施行する。学会による認定施設と専門研修プログラムにおける基幹・連携施設の位置づけについてわかりやすいものとしたい。	新施設制度の制度設計を進めているところである。指導医および専門医数や常勤の有無、組織診断数、剖検数などによって施設を4つに区分し、専門研修プログラムにおける基幹・連携施設の位置づけについてわかりやすいものとする予定である。各施設からの申請によって認定を行うため、従来の登録施設認定の際に記載を求めた研修責任施設は置かない方向で検討している。2026年秋に新施設制度による申請受付、2027年4月の施行を目指している。
	病理専門医研修プログラム審査委員会	大橋 健一	プログラムの改定について、各プログラム責任者に適切に情報を伝え、スムーズに審査を進める。全国的な剖検数の低下に対しても、できるだけ病理専攻医の定員が下がらず、志望者の減少が起きないように対応する。	プログラムの改定について、各プログラム責任者に適切に情報が伝えられ、審査はスムーズに進められた。全国的な剖検数の低下に対しても、年次調整の制度を取り入れてできるだけ病理専攻医の定員が下がらないように、志望者の減少が起きないように対応した。2025年度は100人を超す新たな専攻医の登録が見込まれている。
佐々木	分子病理専門医制度運営委員会	佐々木 毅	分子病理専門医設立当初より検討課題に挙げられていた、病理医以外の他領域への分子病理専門医認定に関してWGを立ち上げ、検討する。また、講習会に関して、分子病理学に関する基礎的な内容と、分子病理専門医を取得した後の高度な内容とが、1つの講習会で行われているなどの課題があり、目的別に、分子病理専門医講習会、分子病理専門医更新講習会、分子病理診断講習会－分子病理を学びたい人のために－の3つの講習会に分類して行う予定である。	3つの講習会「分子病理専門医講習会(分子病理専門医受験のための講習会)」「分子病理専門医更新講習会(更新までに1回は受ける講習会)」「分子病理診断講習会(分子病理を学びたい人のために)」に関して各2回の講習会を開催した。なお「分子病理診断講習会(分子病理を学びたい人のために)」に関しては、専攻医の若い先生方も参加していることから、来年度から受講費を20,000円から10,000円と値下げすること、分子病理診断に関する講習会であることから関係学会に周知することが承認された。なお、本年度の分子病理専門医試験の合格者は119名、更新者は118名であった。
	分子病理専門医研修委員会	西原 広史	本委員会では、分子病理専門医認定のための研修カリキュラムの策定、編集を行う。また検査制度の変更に伴って、必要な改訂を行う。さらに、今年度からは、分子病理診断講習会を企画し、病理診断を目的とした遺伝子検査の臨床実装に向けた教育啓蒙活動を開始する。	本委員会では、承認された新規のCGP検査や保険診療要件の改定に合わせて分子病理専門医認定のための研修カリキュラムの策定、編集を行っている。令和7年度に向けて、カリキュラムの細目の追記、参考図書の整理を実施した。また、2年目を迎えた分子病理診断講習会の講演テーマや講師の選定を行い、WHO分類第5版に従った分子分類に対応するために必要な情報提供活動を実施している。
	分子病理専門医資格審査委員会	畑中佳奈子	分子病理専門医更新申請の電子化を行い、分子病理専門医に関する申請と審査の電子化をさらに進める。また、分子病理専門医研修委員会と連携し、分子病理専門医更新講習会のプログラム作成を行う。	分子病理専門医更新申請の電子化を行い、新規・更新申請の双方の電子化を達成し、審査の簡便化、迅速化が可能となった。2025年度分子病理専門医更新講習会プログラムは、更新に向けた必要知識の習得が可能な内容を盛り込んでいる。
	分子病理専門医試験委員会	前田 大地	ゲノム病理学的な知識に関するリテラシーの向上につながる試験の構築を目指す。日々刻々と変わっていくゲノム医療に即応できるような体制の整備が課題である。	分子病理専門医試験の運用方針、出題の意図に関して委員間のコンセンサスを得たうえで、試験実施に至った。今後の課題についても討議を行い、来年度以降につなげていく方針である。
	分子病理専門医試験実施委員会	非公開		
	分子病理専門医認定拡大検討WG 活動休止予定	佐々木 毅	分子病理専門医制度立ち上げ当初から計画されていた、「認定制度開始、5年後くらいをめどに、認定を病理医以外にも枠を広げる」に関してWGを立ち上げ、検討する。	拡大常任理事会等から病理学に精通していない者に「分子病理専門医」の称号の付与は適切なかの議論があり、また臨床検査医学会で検討していた、他の診療科も含めた遺伝子検査専門医制度も、臨床検査専門医を対象とした研修とするとの連絡を受け、病理学会でも機が熟すまで、一旦WGを終了することとした。
	口腔病理専門医制度運営委員会	清島 保	より社会ニーズに合うよう、分子病理学的見地も加えた「口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的な提供」についての検討を引き続き行う。専門的知識・経験に基づいた社会貢献や自らの知識・技能の向上に関し、関連する委員会の助言・協力の上、口腔病理医が自己研鑽を続けて社会へ還元できるように教育等の環境整備とその改善を図る。	分子病理学的見地も加えた「口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的な提供」を鑑み、「口腔病理専門医資格更新のための生涯学習基準と単位」に分子病理に関する講習会の単位化を行い、次年度より追加する。また、口腔病理専門医資格更新基準の改訂に伴う移行期間中に医療に関する共通講習の受講必須となるため、HPを利用したの周知徹底を図っている。
森井	口腔病理専門医試験委員会	入江 太朗	①人再現性・異時再現性の高い病理診断が行い得る良質な標本・症例を用いること、②現場で遭遇する頻度が高い症例を用いること、③Subspecialtyとして相談を受けることが実際にある症例を用いることを方針としつつ適切な試験が実施される様図りたい。また、病理解剖経験の少なさを補い得る様な教育研修体制の整備についても各委員会との連携協力に努めたい。	質の高い医療を提供し得る口腔病理専門医の資格試験となる様に出題範囲や内容等を検討し、適切な口腔病理専門医試験が実施されたと考える。全身疾患に対する幅広い知識を持って口腔領域の病理診断を担当できる口腔病理医の育成を目指しつつ、病理解剖経験の少なさを補い得る様な教育研修体制の整備について各委員会との連携協力に努めいきたい。
	口腔病理専門医試験実施委員会	非公開		
	口腔病理専門医資格審査委員会	美島 健二	口腔病理専門医試験の資格審査については、試験申請要綱に則って適切かつ的確な運用を行いたいと考えております。本年度は新基準に則った資格更新の3年目(5年で全面移行)にあたります。昨年同様、本年度の更新予定者を対象にWeb説明会を実施し、丁寧な運用を進めたいと考えます。	口腔病理専門医試験の受験資格審査を実施し、全ての申請者が受験資格の要件を満たしていることを確認しました。また、資格更新については、新基準による審査の移行期3年目にあたり、Web説明会にて当該移行年度における更新要件に関して解説しました。その後実施された更新審査についても、特に大きな問題はみられませんでした。
	口腔病理専門医制度基盤整備WG	森 泰昌	口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的な提供を目的とし、口腔病理専門医の継続的な輩出と社会的貢献のため、研修システムの在りかたや全国の歯科大学以外の口腔病理医の在籍状況についてリスト作成など引き続き検討する。加えて関連する機関との連携等口腔病理の認知度向上についてのWG案を作成し、口腔病理専門医制度運営委員会へ提出する。	今年度は、全国の地域をブロック化し口腔病理専門医の勤務状況についての調査、リスト作成を進めている。また全国の口腔病理診断実施施設(施設代表者)に、病歴連携に関するアンケートを行うことについて協議し病歴連携の検体の受入れ余地、問題点、疑問や懸念事項に関してご意見を集約することとした。
佐々木	医療業務委員会	佐々木 毅	・タスクシフト・シェアに関して具体的な検討を行う。・病理解剖に関して、病理学会としての新たな見解を示す(臨床検査技師に対して、厚労省が厚生労働大臣名で「死体解剖実施者」などの称号で、病理解剖を(単独で)行うことができる資格付与を検討していることへの対応を行う。・デジタルパソロジーの導入に伴い、ガラス標本等の保管に関する病理学会の見解を示す。・病理解剖後のホルマリン等に浸漬された臓器の返還要求に関して、厚労省の病理解剖指針には、「遺族からの要求があれば返却しなくてはならない」とあるが、返却に関する病理学会としての見解、方針を示す。・病理診断報告書、細胞診断報告書、病理解剖報告書の患者への提示、提出に関して、病理学会としての方針を示す。	・病理解剖に関しては、臨床検査医学会から「検査技師は単独では病理解剖を行わない方針であること」の連絡があり、また厚労省医政局免許室での「臨床検査技師」に「病理解剖実施者」の資格を付与する議論は中止となったため、しばらく扱わないこととなった。なお病理解剖以外のタスクシフトに関しては日臨技とWGを開催しており、今回は3月末に行う予定である。「診療に関する記録(ブロック、スライドガラス、デジタル画像など)」の保管期間については現在、医療業務委員会で検討を開始している。厚労省法務担当にも確認中。「医賠責保険の適応に関しては、「教室フローベ」検査センター検査報告」も対象となることを保険会社に確認した(三井住友、損保ジャパン、東京海上)。
	コンサルテーション委員会	久岡 正典	令和6年度から稼働開始となる日本病理学会・国立がん研究センター病理診断コンサルテーションシステムの円滑な運営と管理を行い、会員の日常の病理診断を引き続き支援すると共に、我が国の医療の均てん化と質向上に一層貢献する。	今年度より日本病理学会と国立がん研究センターの病理診断コンサルテーションシステムを統合して運営しており、目下順調に稼働している。委員会を3回開催し、システムの運営状況や診断意見報告の進捗状況等の確認と共にコンサルタントや領域チームリーダーの増員、利用者の資格基準などについて議論した。

令和6年度末(2025年3月) 各種委員会活動・支部活動等 中間報告

常任理事 会担当者	委員会名	委員長	令和6／7年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	中間報告(令和6年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
佐々木	社会保険委員会	佐々木 毅	・令和6年診療報酬改定での積み残し課題に関して、令和8年診療報酬改定での要望等について検討を行う。・個別の診療報酬改定の項目とは別に、病理診断科診療所開業の際の「保険診療が全くできない6か月問題」の解決をはかる。	・病理診断科診療所の「6か月問題」に関しては、理事長とともに立法府にも依頼。また当時担当した厚労省医系技官にも確認したところ「6か月間保険診療は全くできないということを想定していなかった」とのこと。今後も交渉を続ける。・R8診療報酬改定では、R6改定に引き続き「悪性腫瘍遺伝子病理組織標本加算」を子宮体癌と脳腫瘍(神経膠腫)に絞って要望。これに関連する研究(ガイダンス作成等)を厚労科研で病理学会として行う予定。・R8診療報酬改定ではR6改定の積み残しを中心に要望することとした(毎回算定など)。
	精度管理委員会	孝橋 賢一	病理診断の客観性を保ち、信頼あるものとするためには精度管理は欠かせないと考える。現在、免疫組織化学染色のみならず、がんパネル検査における検体管理など、課題は多岐にわたっている。当委員会では、NPO法人日本病理精度保証機構や他学会と連携し、それら課題に取り組んでいく。	NPO法人日本病理精度保証機構と連携して、全国の病理診断施設の精度管理について協力した。また、免疫組織化学染色項目についての実態調査を実施中である。
	剖検・病理技術委員会	牛久 哲男	剖検数の減少傾向が続く。専攻医や病理専門医が経験できる症例数が限られてきている。剖検の重要性は変わらないため、一定の剖検診断レベルが維持できるよう引き続き講習会の充実等に努める。	ご遺体取り違え防止策についてとりまとめ、周知を行った。局所解剖の考え方についてとりまとめ、病理専門研修プログラムに周知した。剖検講習会の企画・実施を継続。
金井	ゲノム病理診断検討委員会	金井 弥栄	がんゲノム医療等に関して厚生労働省が行う施策等に対し、日本病理学会から適切な提言を行う。ゲノム医療の実装に伴い、病理診断学がゲノム情報を取り込んで変革を遂げるべき方向性について議論を深める。国際標準化機構ISOにおける外科病理診断のガイダンス文書策定に対し、日本病理学会から意見を発信する。	厚生労働省がんゲノム医療中核拠点病院等の指定要件に関するワーキンググループに参画し、2024年2月27日厚生労働省健康・生活衛生局長通知「がんゲノム医療中核拠点病院等の整備に関する指針の一部改正」において、分子病理専門医を指す「がん遺伝子パネル検査に関連する病理学に関する専門的な知識及び技能を有する常勤の医師」の配備が要件として記載されたことを確認した。国際標準化機構(ISO)の現況について情報共有した。2024年5月24日にISO15189の技術文書Anatomic pathology guidanceが公開され、日本病理学会の『ゲノム研究用病理組織検体取扱い規程』英文版(Pathol Int 68: 63-90, 2018)が参考文献に採用されている。病理遺伝子検査の見直しについて情報共有し、分子病理専門医の取り組みのあり方を議論した。
佐々木	診療関連死調査に関する委員会	羽賀 博典	一般社団法人日本医療安全調査機構の医療事故調査・支援センターの協力学会として、病理解剖を含む個別調査が円滑に進むように協力する。また診療関連死調査に関する情報について、各支部を通して会員の皆様と共有したい。	各支部を通じて、一般社団法人日本医療安全調査機構の医療事故調査・支援センターの協力学会として、病理解剖を含む個別調査に協力した。また同機構とのWeb会議に参加し、診療関連死に関連した病理解剖の必要性の啓発や普及の方策について協議を行った。
	デジタルパソロジー・医療情報委員会	吉澤 明彦	診療報酬上、デジタルパソロジー(遠隔病理診断を含む)用いた病理診断は、「デジタル病理画像を用いた病理診断のための手引き」、「病理診断のためのデジタルパソロジーシステム技術基準」に準拠して行われなければならない。近年、医療情報の管理は厳しくなってきたり、本委員会ではこの2点の改訂、発表をおこなう。一方デジタルパソロジーは病理医不足を補う技術であるにもかかわらず広がりは限定的であり、様々な観点から解決策を提言する予定である。	デジタル病理に関する二つの手引きを改訂し、2024年4月に発表。本学会や関連学会での広報を行ってきた。周知に関して、病理専門医の認識として重要な部分を専門医試験の一部として出題する提案を理事会にあげた。今後も病理学会にてe-Learningなどのコンテンツを作成し周知を進める予定である。
	病理診断・臨床検査あり方検討委員会	鶴山 竜昭	病理診断・臨床検査室の標準化および新技術導入に関する国内外のさまざまな取り組み、国際規格・ガイダンス・ベストプラクティスの策定に、日本病理学会が積極的に参加、発信できるようにしたいと考えています。	国際標準化機構ISO専門委員会TC212で作成されたISO15189「臨床検査室―品質及び能力に関する要求事項」の改定経緯、ISO15189日本語版をもとにJIS(『日本産業規格』)の策定委員会が組織、鶴山が学会から参加した。本委員会でもJIS策定に関する意見コメントを募集、委員複数名からコメントあり、JIS策定委員会に伝えた。同文書は用語定義追加などごく一部のISO15189日本語版の修正にとどまり、2025年度中に公開出版予定である。
	病理解剖資格に関する合同WG 活動休止予定	佐々木 毅	現在、厚労省の班研究として検討が行われている、病理解剖の検査技師への資格付与に関して、日臨技との合同WGを立ち上げ、検討し、提言を取りまとめる。	病理解剖に関しては、日臨技から「検査技師は単独では病理解剖」を行わない方針であることの連絡があり、また厚労省医政局免許室での「臨床検査技師」「病理解剖実施者」の資格を付与する議論は中止となったため、WGを休止することとした。
田中	広報委員会	笹島ゆう子	(1) 社会への情報発信: 学会HP内一般向けページのブラッシュアップ、SNSの効果的な利用、公開展示やパンフレットの作成・配布などを通じて社会における病理学の認知度向上を目指す (2) 会員向けの情報発信: 各種情報の共有を円滑に行い、会員の利便性を考慮した学会HPの構築を目指す。 (3) (1)(2)を目的とするHPリニューアルのためのWGを立ち上げる	(1) 社会への情報発信: 学会HP内一般向けページのブラッシュアップやSNSの効果的な利用、公開展示やパンフレットの作成・配布などを通じた活動を継続中 (2) 会員対象: 評議員更新手続き他 (3) (1)(2)を目的とするHPリニューアルのためのWGを立ち上げた
	社会への情報発信委員会	伊藤 智雄	市民、学生、初期研修医向けの様々な情報発信を強化する。具体的には病理学会総会など様々な機会を活用した市民展示、各種パンフレットを作成する。新たな情報発信の手段とコンテンツについて検討し、実現に向けて提案・努力する。	2024年9月21日、甲子園球場にて阪神電気鉄道によるHANSHP健康メッセが行われ、神戸大学とともに病理のブースを出展した。病理に関するミニ講義、8Kによるマクロ観察、液体窒素実験などにより、多数の親子に情報発信を行った。2025春の総会会場でも同様の企画を執り行う予定である。
	病理情報ネットワーク管理運営委員会	宇於崎 宏	テキストファイルと共にバーチャルスライドデータを含む画像が投稿可能な、病理情報ネットワークセンターの安定した運用に引き続き、注力して参ります。	引き続き、病理学会員が無料で使える病理情報ネットワークセンターの安定した運用を行う。
	ホームページリニューアルWG	笹島ゆう子	新設	2024年7月WGリニューアルを目的としてWGが立ち上げられた。WGメンバーには、基幹となる技術面を担当するテクニカルチームの他、コンテンツ担当、他委員会等との連携担当などが含まれる。テクニカルチームを中心に、複数の業者とのオンラインMTG、各社からの見積もりなどを元に検討を重ね、最終的にリニューアルの委嘱先として杏林舎を選定した。改めて出してもらった見積もり書を拡大常任理事会に提出し承認された。今後具体的な作業を進めていく予定。
金井	教育委員会	金井 弥栄	治療指針を豊富に提供しうる病理診断学と、広汎な研究領域にプラットフォームを提供する基礎医学としての病理学の真価を、学部学生に浸透させるための卒前教育のあり方について、継続的に議論する。病理コア画像の充実に努める。	医療機関へのアンケート結果をもとに、第113回日本病理学会総会ワークショップにおいて、ポストコロナの卒前教育への提言を行なった。病理コア画像を適正に管理し、不正使用等の案件に対応した。病理コア画像の正常組織編について、新規組織写真を追加して充実を図った。
豊國	病理医・研究医の育成とリクルート委員会	宮崎 龍彦	この度、病理医・研究医の育成とリクルート委員長を豊國伸哉先生から引き継ぐこととなりました。病理専門医取得者数の減少が危惧されている中、非常に重要な仕事を担当すること、身が引き締まる思いです。まずは社会への情報発信委員会や広報委員会とも協力して、学生・若手医師に病理学を知ってもらう、興味を持ってもらう、そして病理医、病理研究者を目指してもらうという三段階を入口として、それに続く若手育成についても若い人たちの希望を聞きながら進めていきたいと思っています。何卒宜しくお願い申し上げます。	2024年6月16日に東京ビッグサイトにてレジナビ東京に出展した。34名の来訪者を迎え、一人30分を超えるような充実した対応を行い、成功裏に終わった。2025年度に関しても出展予約を行っている。今春の専攻医登録大幅増加に、少しは寄与できたかと思考する。病理学会100周年記念新人賞の募集を行い、今年度は4名の応募を受け入れた。厳正に審査した結果4名全てを1次選考合格とし、第114回総会二日目に2次選考会としてプレゼンテーション審査を行うこととした。3名以内に新人賞を贈呈する。
	病理診断講習会委員会	谷野美智枝	病理診断講習会は「病理専門医の生涯教育」と「病理専門医を目指す若手病理医の診断力の向上と知識の整理」を目的としています。日本病理学会総会における重要な企画であり、学会参加者に人気の高いプログラムです。これからも、若手からシニアの幅広い病理医の先生たちに興味を持ていただけるような系統的*臓器別講演会を開催していきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。	谷野(旭川)、南條(秋田)、橋本(福島)、大橋(新潟)、中黒(名古屋)、孝橋(大阪)、森谷(滋賀)、門田(香川)、柳井(岡山)、秋葉(久留米)の10名の新委員で令和7年度の病理診断講習会の内容に関する審議を行い、講演内容を決定した。学会事務の宮本さんのご協力のもと演者から頂いたテキストを元にハンドアウトの作成やWSIのアップロードの作業を行っている。演者への謝金が他の講演会より低額であったことから同等の金額への再設定を理事会に申請した。
	海外研修委員会	黒瀬 顕	新型コロナウイルス感染の蔓延により中止していたハンガリーSimmelweis大学での病理解剖研修は、2024年度夏から再開することとなった。Simmelweis大学の担当者はDepartment of Pathology and Forensic MedicineのKiss教授が新たに担当することとなった。既に学会ホームページ上で再開の案内を行っており、程なく正式な募集を開始する予定である。また病理学会期間中に当コース参加者の懇親会を継続して行う予定で、参加後の交流も当コースの意義としたい。	Simmelweis大学ではGlasz先生にかり、Kiss先生(Professor and Director, Department of Pathology and Forensic Medicine)がコースディレクターとなり、2024年度第6回ハンガリー病理解剖トレーニングコースを開催する運びとなった。5名応募があり(うち1名は病理専門医既取得)全員を受け入れた。2024年3月に名古屋で開催された病理学会総会では豊國先生のお計らいにより会長招宴にKiss先生を招待し、日本病理学会理事長小田先生ほか理事と親交を持つことができた。総会期間中に開催した海外研修委員会にはKiss先生および2024年度の参加者のうち4名が参加した。Kiss先生のスライド上映によりSimmelweis大学での病理解剖研修について紹介があり参加者と事前に打ち合わせをすることができた。8月11日から17日に開催された研修では以前にも増してSimmelweis大学側のスタッフおよび指導の充実が図られ、参加者全員が満足して研修を終え、修了証書を授与された。現在、2025年度の開催に向けて研修希望者を募っており、3名の応募を得ている段階である。
金井	生涯教育委員会	相島 慎一	生涯教育委員会では、会員が生涯にわたり病理学に関する知識を広げ、技能を磨くための継続的な学習制度を確立する。これまで構築している組織診断に関する生涯教育 e-learning、病理診断講習会および剖検講習会の標本提示を中心として、細胞診断などを含めてより一層コンテンツを充実させ、病理診断能力の質を担保するような生涯教育サイトを構築していく。	過去に出題された病理専門医試験を基にして、生涯教育委員会の各委員で分担し新たなe-learning問題を80問作成した。その結果、すでにストックされていた180問と併せて、260問の自己学習コンテンツとなった。e-learningがランダムに出題される形式にすること、病理専門医資格更新のための出題数や合格基準について、病理専門医運営委員会(森井委員長)にて検討いただき、生涯教育ページの文言もわかりやすく修正した。
	胃癌教育助成活動WG	牛久 哲男	新設	胃癌に関する教育助成プログラムに採択されたため、日本における胃癌の病理診断の均てん化を目指すべく、教育セミナーを企画するサブワーキングを立ち上げ、2025/3/2にハイブリッド開催、さらにその後一か月間のオンデマンド配信を予定している。
	診断病理サマーフェスト委員会	矢持 淑子	診断病理サマーフェストは、「病理と臨床の対話」という副題にもあるように、病理医だけではなく各科臨床医や放射線科医との対話を通じ、多方面から病理診断を系統的に考えられる、独自性のある講習会となっています。今年で18回目となり、テーマとなる臓器も2クール目に入っています。今後のテーマの検討、そして円滑な運営や開催を目指していきます。	令和6年度の第18回診断病理サマーフェスト(テーマ:「骨軟部腫瘍」)は、現地対面及びWEBのハイブリッド開催+オンデマンド開催形式により、700名を超える参加者があり、非常に盛況であった。次年度第19回(テーマ:「乳腺」)もハイブリッド開催+オンデマンド開催を行う予定である。また今後扱うテーマについても引き続き検討していく。
	ゲノム病理標準化講習会委員会	金井 弥栄	ゲノム研究用病理組織検体取扱い規程の内容、組織バンキングの実際、ゲノム研究の具体的な成果について解説する「ゲノム病理標準化講習会」を開催することで、分子病理専門医が研究基盤整備に貢献することの意義を周知する。ゲノム研究における病理学(病理医)の役割を周知するべく、日本病理学会外への発信にも努める。	第13回ゲノム病理標準化講習会を、2024年7月にオンデマンドで開講した。研究基盤整備における病理学の立ち位置をまず述べ、研究用規程を解説し、一線の病院で研究用規程をどのように遵守して組織の採取・保管を行うか、研究用規程を遵守するとどのようなバイオバンクが構築できるか、バイオバンク試料(研究用病理組織検体)を用いてどのような研究成果が挙げられるかを発信した。バイオバンク関連学会や国立病院機構に呼びかけることにより、日本病理学会外からの出席を含む最多の受講者を得て、受講者アンケートで本講習会が研究促進に貢献できた事例も確認できた。
北海道支部	北海道支部	樋田 京子	第1期目となる。これまでに実施したWEB併用形式も活用し、セミナーを企画・開催する計画である。また6月には合宿・対面形式で、病理夏の学校を開催する予定である。支部会の発展と若手病理医の育成に尽力したい。	令和6年度は学術集会(標本交見会)を4回、10月には北海道医学大会病理分科会を開催した。また、5回の共催セミナーも開催した。臨床病理、研究ともに会員の活発な学術交流が行われた。また、病理夏の学校は6月に1泊2日の合宿形式で行われ、50名程度の学生の参加があった。特別講演に加え、キャリアパスについての若手病理医からの発表、病理標本交見会など多彩なプログラムにより、学生からは大好評であった。
	東北支部	大森 泰文	会員間の意見交換の活性化と若手の活躍への支援に注力する所存である。また、今年度より定例の支部集会を1回増やし、12月に研究成果を演題としてオンライン形式で開催することになった。これが軌道に乗るように鋭意努力したい。	7月13・14日に支部総会および学術集会を福島市にて対面で開催し、100余名の参加者を得て交流および情報交換を行った。12月7日には初めての試みとして、研究に特化した内容での学術集会をオンラインで開催し、70余名の参加者を得て各研究室の研究活動を学び情報交換をした。2月15・16日は支部総会および学術集会を仙台市にて対面で開催し、約120名の参加者を得た。特に若手の発表の増加が顕著であり、活発な議論が展開された。現在、8月23日に開催予定の夏の学校(弘前市)に向けて鋭意準備中である。

令和6年度末 (2025年3月) 各種委員会活動・支部活動等 中間報告

常任理事 会担当者	委員会名	委員長	令和6／7年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	中間報告 (令和6年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
大橋	関東支部	笹島 ゆう子	年4回の学術集会(第102回:5月25日獨協医大、第103回:10月19日筑波大、第104回:12月7日東邦大、第105回:3月頃、世話人未定)およびサマーセミナー(8月17日日大)を予定しています。 基本的には対面とオンラインのハイブリッド開催とし、多くの会員が自由な形で参加できる会を目指します。サマーセミナーは対面・懇親会付きで開催し、医学生や初期研修医へのアピールを強めます。	定期学術集会(第102回:5月25日獨協医大、第103回:10月19日筑波大、第104回:12月7日東邦大)およびサマーセミナー(8月17日日大)が滞りなく開催された。今年度最後の学術集会は第105回(3月8日杏林大)を予定。いずれも対面とオンラインのハイブリッド開催であり、多くの会員が自由な形で参加できる会となった。サマーセミナーは対面・懇親会付きで開催され、医学生や初期研修医への積極的なアピールの場となった。
	中部支部	宮崎 龍彦	村田哲也先生の後任として、日本病理学会中部支部を担当することになりました。中部支部は、支部交見会・スライドセミナーの他、東海病理医会(ワカロウ会)や北陸病理集談会など、暖かい雰囲気です診断病理とともに学ぶ場を多くもち、会員相互の風通しもよい、素晴らしい空気を持っています。これを絶やさないよう支部長として頑張っていきたいと思っています。よろしくご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。	2024年7月に第92回中部支部交見会を富山で、2024年12月に第93回中部支部交見会を対面開催し、それぞれ88名、133名の参加を得た。また、2025年3月に第28回中部支部スライドセミナーを対面開催し、盛会となった。また、2024年8月31日に第15回中部支部病理夏の学校をWeb開催ながら5年ぶりに実施し、52名の参加を得た。さらに、月1回の東海病理医会(ワカロウ会)による診断精度向上・若手育成事業も安定して進んでいる。
	近畿支部	羽賀 博典	学術集会の一部で、参加者の利便性を考慮して、Webでの開催を復活させる予定である。逆に、昨年までWebで開催していた「病理夏の学校」は、令和6年度から対面開催の再開を予定している。症例検討の内容が高度化し、気軽に演題が出しにくいという声もあり、昨年度から気軽に演題を出せるセッションを設けたが、その活用が今後の課題である。	年4回の近畿支部学術集会のうち2回をオンライン開催、2回を対面開催で実施した。今後対面開催を増やすに当たり、学術集会の参加費の値上げを検討している。夏の学校は、1日で対面開催で実施した。今後も対面開催継続の予定である。ホームページをリニューアルした。症例検討の演題数が減少傾向にあるため、学術委員会では演題数増加に向けて協議を行った。来年度からは、研修医、専攻医から、ベテラン病理医までの、幅広い年代に向けての応募を予定している。
	中国・四国支部	増本 純也	中国・四国支部会員の知識を更新し、日々の診断業務に役立つ教育セミナーを充実させ、学術総会では学術交流を推進し、会員相互の共同研究の機会を提供したいと思っています。夏の学校では学生や初期研修医にリサーチマインドに溢れた病理学の魅力とそれらが具現化された刺激的な病理診断の魅力を伝えたいと思います。	学術交流と会員のリサーチマインドの涵養のため、支部総会1回を含む支部学術集会(スライドカンファレンス)を3回開催(第144回高知大学:世話人戸井慎先生、村上一郎先生2024年6月22日(WEBのみ)、第145回岡山大学:世話人山元英崇先生2024年10月5日(WEB+対面)、第146回鳥取大学:世話人桑本聡史先生2025年2月1日(WEBのみ))した。若手病理医の育成と相互交流のため、第145回開催時には病理専門医更新1回までの若手による「若手の会」が復活し(担当:業務委員長福山医療センター表梨華先生)、50人以上の対面参加が実現した。初期研修医にリサーチマインドに溢れた病理学の魅力とそれらが具現化された刺激的な病理診断の魅力を伝えるため、病理夏の学校を開催した(広島大学:世話人有廣光司先生)。支部会員の日常診療の役に立つ教育講演を1回開催した(世話人業務委員長福山医療センター表梨華先生)。いずれも当初の目的に沿って行うことができた。開催に当たり多大なご尽力を頂いた先生方にはこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。
	九州・沖縄支部	久岡 正典	当支部定例の活動である「九州・沖縄スライドコンファレンス」を年6回、対面あるいはWEBで開催する。また、それに付随して学術講演・教育セミナーを年2回計画すると共に、第400回の記念となる会では特別な催しを企画する。恒例の夏の病理学校を開催し、病理医のリクルートに引き続き尽力する。	例年と同様に年6回のスライドコンファレンス(対面3回、WEB3回)を開催し、学術講演2回、企業協賛セミナー2回を合わせて実施した。その中で第400回記念となる会(熊本)では特別企画としての学術講演や最多演題出題者等の表彰式を挙行した。10月には九州大学にて「第12回秋の病理学校」をハイブリッド開催し医学部学生等約100名が参加した。
小田	監事	伊藤 浩史	私は昭和61年に宮崎医科大学(現宮崎大学医学部)を卒業後、一貫して病理学研究、教育、臨床に携わって参りました。定年退官まであと2年となり、お世話になった病理学会への最後のご奉公として、理事会業務や財務状況の把握等、病理学会会員の皆様の代わりとなって監視役を果たしたいと思っています。何卒よろしくお願い致します。	あつという間の一年間でした。理事会議事録を監査の上、押印するのが仕事とはいえ、理事の皆様の大変な業務と学会への献身的な貢献に驚くばかりでした。残り任期もあと一年となりましたが、学会員の皆様、理事会の皆様の業務の少しでもお手伝いできればと思います。本年度もよろしくお願いいたします。
	監事	九嶋 亮治	一般社団法人における監事には「理事の職務執行の監査を行い、監査報告を作成する」「理事が作成した会計書類、事業報告等を監査する」役割がございます。長らくお世話になった病理学会への恩返しのためしっかりと努めたいと思います。	理事会の円滑な運営に今後とも協力させていただきます。